
tiny

都心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

tiny

【コード】

N26190

【作者名】

都心

【あらすじ】

小さく、つまらない者達へ。

酷い夜だった。

薄いビールを飲み干した後のような気だるい気持ちをぶら下げたまま、誰も走っていない海岸通りを独りでふらついていた。

明かりは場末のモーターとバカに遠くの灯台と街灯くらいのもので、足元すら見えない中、俺はぎってきたチリ・ビーンズの残りをポロポロこぼしながら歩いていった。

ポケットを探って煙草の箱を取り出す。もう一本も残っちゃいない。

舌打ちまじりにそれをぽとりと落とす。浜の方へブン投げるような元氣も当然残っちゃいなかった。

最後にまともな飯を食ったのは何日前だろう。

最後にベッドに寝転がったのは何週間前だろう。

珍しくもない病氣とばかり仲良くなって、この街で作った女はみんなどっか行っちゃった。

悪ふざけみたいな雑踏の中で、叫びまくってればいいだけの日々は、もう戻ってこないのだろうか。

結局俺は何も変えられなかったみたいだ。

畦道と林ばかりの地元を飛び出して、ロックンロールとクスリの匂いしかないこの街に行き着いたのが、ちょうど三年前。

俺は神様にでもなつてやるつもりだったのだろう。

つい数ヶ月前までは。

それはとても簡単な話で、組んでいたバンドが解散した。

というよりは、だ。

メンバーを引っこ抜かれた。

他の奴等は俺と違って、感性だけは持ち合わせていた。

よくある話だ。

喰っちまう予定だった金持ちの対バン相手に、ライブの後楽器隊を買われたわけだ。

俺たちは、他で工面しないと満足にエフェクターも揃えられないようなクソバンドだった。

目の前の札束や環境に飛びつくことは、別に悪いことじゃないさ。残ったマネージャーも、故郷に帰りやがって、俺は安い酒をあおりながら潮風に当たるしかなかった。

ああ、やっぱり つまんねえ話だ。

「ったく……」

世界が。

世界が揺らいだ。

鈍い音がして、後頭部に痛みが走った。

じわじわと温かいものが流れ始めたのがわかり、それに応じて吐き気もすっかりとこみ上げてきた。

さっきまで俺を斜めに見下していた街灯が今は真上に見えて、俺は自分が派手にスツ転んだということにやっと気付いた。

流血なら心配ない。

一緒に汚い菌まで出しちまおう。

このまま逝くのもいいかもなあって思えるほど綺麗な夜だった。

意識は朦朧としているというのに、眼球だけは渴きを忘れず、きよろきよろと動き回っている。

静かな、静かな葬式。
参列者は一人。充分。

(……寒い)

コートの隙間から冷気が流れ込んでくる。
ついでに肺に溜まったドス黒いのも全部持ってってくれよ。
口八で構わないからさ。

夜の間から、何か落ちてきた。

雨だ。

それはすぐに世界中の雑音をかき消すような、冷たい、冷たい大雨になった。

それは、もう、五月蠅いくらいに。

俺の存在も、水捌けの良い道路みたいに、溶けて流れて消えちまえばいいのに。

それがいい。

やろつ。じゃない。やってくれよ。

少ない脳味噌で、搾り出した結論だった。

染め上げた髪の毛の茶も、コートの黒も、ビーンズの橙も、鮮血の赤も、みんな透明になってなくなっちまえばいい。

今は寝かしといてくれよ。

雨は、暫く降り続いた。

純粋な灰色しかない夜空を見上げ、冷水に身体を晒していたら、頭が少しだけ冴えてきた。

思い出したのは、あの娘のことだった。

忘れちゃいけない。
忘れちゃいけない。

こっちで女と遊んでいたって、どんな爆音で踊り狂ってたって、いつだって頭のどこかにあの娘のことを。

麦畑の中の、ワンピースを着たあの娘を。

(何やってんだろ……)

もう何年帰ってないだろう。

いい加減くだらない夢を語るのは止めただろうか。

今でも寝る前はポップスを聴かないといけない性格なんだろうか。

飼っていた鳥が死んで泣いちゃいないだろうか。

少しは料理、上手くなったか。

意味もなく入った雑木林で、虫に食われて文句垂れてないか。

ちよっかい出すあのツラを上手くあしらえるようになったか。

俺が買ってやったピアスはまだ付けてるか。

掠れた声は　　今でもあのときのままなのか。

……

気付けば、俺は立ち上がっていた。

勿論まだ雨なんか止んじやいなかったが。

(電話、どこだろうか……)

大体、この時間は俺の電話を待ちながら、部屋で本でも読んでるんだろう。

小難しい、哲学の本を。

電話見つけたら、何話そつ。

t i n y
f i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2619o/>

tiny

2010年10月11日21時34分発行